

題目：罰するリーダー、罰しないリーダー

～サンクションを行う人がリーダーに選ばれる状況の検討～

氏名：平山 綾香

指導教官：高橋 伸幸

罰行使者は一般的には好まれないため、罰行動は非適応的だと考えられる。しかし先行研究では、罰行使者は信頼され、リーダーにしたいと思われる可能性があることが指摘されていた (Barclay, 2006; Horita, 2010; 中川, 2010)。ただし、これらの研究ではリーダーにしたいかどうかを質問紙上で尋ねただけであり、また、単にリーダーという言葉を使ったのみで、どのようなタイプのリーダーであるかを考慮していなかった。そこで本研究では、5つの異なるタイプのリーダーを想定し、実際に罰行使者が各タイプのリーダーに選ばれるかどうかを検討した。

本研究では、まず第1ゲームとして4人グループでSDとサンクションを行い、ディセプションを用いて参加者以外のメンバーがそれぞれSDで提供した罰行使者、SDで提供した罰非行使者、SD非提供者となる状況を作った。次に、第2ゲームとしてリーダーが必要となるゲームを行うと説明し、リーダーにしたい人物(自分を除く)に投票させた。第2ゲームは、「資源の分配」「グループの方向性の決定」「第三者として資源を分配」「メンテナンス」「サンクショナー」と、リーダーのタイプ別に5条件設定した。著者は、「メンテナンス」リーダーには罰行使者よりも罰非行使者が選ばれ、「方向性の決定」リーダーには罰行使者と罰非行使者が同程度選ばれ、その他のリーダーには罰行使者の方が罰非行使者よりも選ばれると予測した。

実験の結果、罰行使者が罰非行使者よりもリーダーに選ばれた条件はなかった。参加者がSDで提供したかどうかリーダー選択に影響を与えることはわかったが、SD提供者でさえ罰行使者よりも罰非行使者を選んだ。これは、各条件でリーダーに必要なと思われる資質が想定とは異なっていたことと、参加者が想定とは異なる理由でリーダー選択を行っていたことの両方が原因であったと考えられる。罰行使者への評価は予想よりも低かった。ただし、罰行動をグループのためであると認識していた参加者は、「第三者として資源を分配」するリーダーには罰非行使者よりも罰行使者を選び、それ以外のリーダーにも罰行使者を罰非行使者と同程度選んでいた。よって、罰行動がグループのためであると強く認識されている場合には、罰行動は適応的になる可能性があるといえる。